

言ふべくんば真実を語るべし

校長 中嶋哲彦

かつて、河上肇（1879年10月20日～1946年1月30日）という経済学者がいた。河上は、京都帝国大学の経済学部でマルクス経済学を研究・教授した第一級の経済学者で、『資本論入門』（1928～1929年）や『経済学大綱』（1929年）などの成果を残した。また、新聞に連載した『貧乏物語』（1917年）が書籍として刊行されるとたちまちベストセラーになった。1920年には同学部の学部長に就任したが、1928年大学を辞職して、大山郁男とともに労働農民党結成に参加し、さらに1932年には日本共産党に入党して、自らの理論を実践に移したが、1933年治安維持法違反で検挙された。

1937年6月15日、出獄。それ以後は自宅で漢詩に親しみ『自叙伝』を執筆したが、1937年7月7日から1942年12月31日までの期間、表紙に「閉戸閑詠」と墨書したB5版の大学ノート2冊に、河上は時々の思いを綴った。出獄直後の河上肇を花田比露思が見舞いに来たときには、「有りがたや七年ぶりに相見ればふるさとに似し君のおもかげ」（1937年7月7日）と歌い、また豊多摩刑務所での獄中生活を思い出して「茶も飲めず話も出来ず暮れてゆく牢屋の冬はさびしかりしも」（同年12月11日）と歌った。

しかし、1940年10月9日、「時勢の急に押されて悪性の変質者盛んに輩出す、憤慨の余り窃に一詩を賦す」として河上肇が書いた詩は、いやしくも研究という行為を通じて社会と繋がる者はすべからく心に留めなければならないものだと思う。

言ふべくんば真実を語るべし、
言ふを得ざれば黙するに如かず。
腹にもなきことを
大声挙げて説教する宗教家たち。
真理の前に叩頭する代りに、
権力者の脚下に拝跪する学者たち。
身を反動の陣営に置き、
ただ口先だけで、
進歩的に見ゆる意見を
吐き散らしてゐる文筆家たち。

これら滔々たる世間の軽薄児、
時流を趁うて趨ること
譬へば根なき水草の早瀬に浮ぶが如く、
権勢に阿附すること
譬へば蟻の甘きにつくが如し。
たとひ一時の便利身を守るに足るものありとも、
彼等必ずや死後尽く地獄に入りて極刑を受くべし。
言ふべくんば真実を語るべし、
真実の全貌を語るべし、
言ふを得ざれば黙するに如かず。

(ルビ、中嶋)

戦前日本の思想統制は、世界に類を見ないほど苛烈なものだった。河上自身、その思想と行動ゆえに治安維持法違反で検挙された。この時代、学者や文筆家の中には筆を折った人々も少なくなかったが、それ以上に多くの人が時流に乗って筆を曲げ、その中には目先の利益のために説を歪める人もあった。

今日の日本は、河上肇の時代と違って、思想警察が学問や思想を取り締まる状況にはない。いや、まだその状況にはない、と言うべきかもしれない。

名古屋大学学術憲章には「勇気ある知識人を育てる」という言葉がある。この「勇気」には多面的な意味が含まれていると思うが、今日もなお、真理の探求や研究成果の公表には、河上肇の時代と同じ意味で勇気を奮い起こさなければならない場面がある。もしもその勇気の必要を少しも感じないとすれば、その人の精神的自由はすでに深刻な危機に立たされていると考えなければならないかもしれない。

言ふべくんば真実を語るべし、
言ふを得ざれば黙するに如かず。

河上肇のこの言葉は、研究に従事する者として、心に留め続けていけなければならないと思う。